

【教室環境整備】

事例No. 1

特別支援教室の環境整備（品川区の取組）

（１）基本情報(平成29年9月1日現在)

特別支援教室利用児童数	335名
巡回指導教員数	30名
拠点校数	8校
巡回校数	29校

（２）取組のポイント

児童が落ち着ける学習環境を整えた。

体育館など広い場所で運動ができるように、各校の調整を行った。

（３）実際の取組

①各校の特別支援教室内の学習環境の調整に当たっては、巡回指導教員・各在籍校の管理職・特別支援教室専門員が適宜話し合いを行いながら進めている。話し合いにおいては、特別支援教室専門員が、使用を希望する教室の図面等の資料を作成するなど、特別支援教室専門員の役割も重要となっている。

【A小学校の事例】

グループ学習室は、本棚にカーテンを掛け、中を見えなくしている。タッチの物差しや「こんなときどうしますか」という困った時の対応法を掲示している。個別学習室は、ホワイトボードやタイマー以外のものはなく集中して学習できるようにしている。



【B校の事例】

パーテーションを使い、教室の背後が見えないようにしている。教室前面の壁には何も貼らず、活動に集中できるようにしている。前面のホワイトボードには、その日の活動予定を書き、見通しが持てるようにしている。



【C校の事例】

部屋が長方形なので、個別指導をする際パーテーションで仕切りやすい。入口が細くなっているため、通路に縦長のホワイトボードを置くだけで、外から見えないように工夫している。



②品川区では特別支援教室開始前においては、通級指導学級の設置校で、体幹トレーニングなどの運動機能の活動をする際には体育館などの広いスペースを確保していた。平成27年度に特別支援教室訪問指導モデル実施をする。その中で、各在籍校で広いスペースを確保するためには、特別支援教室の目的や効果を説明し、周知していく必要があることが分かった。そこで、教務主任会や副校長連絡会などで特別支援教室について説明する機会を設け、体育館などの広いスペースを特別支援教室の授業でも使えるように依頼をした。依頼時には、拠点校が訪問する学校グループの週の予定表を作り、教育委員会とともに各校を訪問して訪問曜日の説明をした。決められた曜日の中で各校には「○曜日の1時間だけ体育館などの広い部屋を確保してほしい」と依頼をした。その結果、全校で訪問曜日のうち1時間は広い活動場所を確保することができた。



(4) 取組の成果と今後の展開

各在籍校に広いスペースの確保を依頼したことで、活動が行いやすくなった。また、特別支援教室の目的や効果を周知したことで、特別支援教室につながる人数も増えている。今後は利用児童数の増加に伴い、施設面の調整がより必要になってくることが想定される。現在各在籍校には一つの特別支援教室を設置しているが、個別指導やグループを二つに分けて指導する場合は、教室の仕切りを工夫したり、他の教室を用意したりする必要が生じる。その際には、各在籍校の理解を得るため、引き続き特別支援教育コーディネーター連絡会などの教員向けの連絡会や各校のコーディネーターによる伝達研修等で理解・啓発をしていく予定である。

また、各在籍校の学習環境の調整は、利用児童数が増える中でより個々のケースに合わせて行う必要があると考えられる。利用する教室の拡充や専門員との連携を大切にしながら引き続き行っていく。

【教室環境整備】

事例No. 2

可動式パーティションの活用（葛飾区の取組）

（1）基本情報(平成29年9月1日現在)

特別支援教室利用児童数	703名
巡回指導教員数	64名
拠点校数	7校
巡回校数	42校

（2）取組のポイント

限られた教室を有効に活用するための工夫

児童の状況に合わせた部屋の活用方法

（3）実際の取組

①背景

小学校へ特別支援教室の全校配置に伴い各学校において特別支援教室を整備することとなった。

②基本的な考え方

各校を訪問し、「空き教室の有無」・「併用可能な教室の有無」・「対象児童の想定」を調査した。

その中で、情緒的課題を持つ児童の特性を捉え、利用しやすい教室となるよう検討を行った。

③教室整備に向けた課題

- ・特別支援教室に割当て可能な教室は、空調・光沢・防火法などの課題があり、確保の難しさがあった。
- ・実質的に教室全体を特別支援教室として活用できる学校は少なく、半教室を活用する学校が多かった。
- ・指導内容や児童の特性から、個室ブースが必要である場合や、広い活動スペースが必要な場合がある。
- ・自閉傾向が強く音や光に対する過敏のある児童は、刺激を減らすため、ある程度情報をコントロールできるスペースが必要。

④可動式パーティションの活用

- ・半教室で個別のブースを設置すると小集団活動が難いため、可動式パーティションを積極的に取り入れた。
- ・個々の課題や特性に合わせ、可動式のパーティションを臨機応変に移動し、限られたスペースで多様な指導を可能とした。
- ・自閉傾向が強い児童の場合は、4方向をパーティションで囲うことで簡易的な個室ブースとすることも可能とした。
- ・パーティションはホワイトボードとして活用できたり、磁石が付く製品とし、パーティション以外の活用方法も可能とした。

(写真左・中央：ホワイトボードとしても活用できるパーティション)

(写真右：個別学習のスペース(パーティションをボードとしても活用))



(4) 取組の成果と今後の展開

【取組の成果】

限られたスペースを有効に活用することで、特別支援教室を小学校の全校に配置することができた。また、その後にモデル事業として実施した中学の特別支援教室では、小学校で得たノウハウを活用することができた。

【今後の展望】

葛飾区では、今後情緒固定学級の新設も検討されている。情緒固定学級では、更に教室数が必要となるが、どの学校でも教室数が不足しているのが現状である。限られたスペースを有効活用しつつ、児童に効果的な支援が行える環境を構築することが必要であると考えている。